

(様式 6 - 2)

研究成果概要

所属学校名 伊勢市立厚生中学校
職・名前 教諭 酒徳あきつ

- 1 留学先の名称 三重大学特別支援教育特別専攻科
- 2 研究主題 自閉症児に対する音楽療法の一事例
- 3 研究成果の概要

自閉症の人が抱える困難は個人差が大きく、一括りにすることは難しい。その一方、自閉症児にとって音楽は、興味や関心を強く刺激する媒介であることが長い間の研究により知られている。しかしながら、自閉症児に対して音楽のどのような側面が有効であるのかについて不明な点も多く、実証的な研究の蓄積が必要とされる。

本研究の目的は、2つの太鼓やピアノなどの楽器を中心とした音楽療法によって、対象児が目的をもってものに接し、身体の使い方と手指の巧緻性を獲得していく過程を事例として取り上げ、音楽療法の効果について分析を行うことである。

対象児は中学校1年生の男児で自閉症、特別支援学級に在籍する。1歳半の健診で発達の遅れについての指摘を受け、1歳9か月より療育を受け始めた。療育手帳はB1を所有している。小学校4年生のときから音楽療法教室に通い、月2回30分、太鼓とピアノを中心とした個人セッションを受けている。

太鼓の取り組みについては肘を作用点とした前腕の運動がどれくらいできているかに特に注目した結果、進歩が見られた。ピアノに関しては、A君は音に敏感で好きな曲が原曲と違う調であることがわかったり、自分で転調を楽しんだりしていた。短い間でも手や腕、肘の使い方に進歩が見られた。親指の位置が、初めは白鍵よりも10cm近く下に落ちた状態で弾いていたのが、1月にはかなりよい位置まで来た。手首を人に支えてもらう必要もなくなってきた。また肘についても体から離れた状態を保持できてきた。

本事例のセラピストは、クライアントの発達段階や身体自己像を重視し、音楽を通して運動面や社会面での発達を促そうとしていた。学校現場においても、その姿勢から学ぶところは大きい。音楽療法の視点を取り入れた音楽活動は、特別支援学級の生徒に多くの面で望ましい成長を促すことが期待される。今後も音楽療法の専門家や組織と連携して交流を深め、学校現場に活かしていきたい。